

さぁ今回も大好評の坂井先生のコラムの時間です。より具体的な表現になっていますので、すごく参考になるとと思いますので、是非ご家庭でも取り入れて見て下さいね～！！今回の最後に出てくるボードメーカーはサンフェイスにもありますので必要な方はまだご相談ください！！ それでは、はじめりまじまりい～～♪

第11回『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

わかるように伝えてもらうためにシンボルを

(ア) 発信できる環境はあるのか

先月号では、安心できる環境を整えるための方法として、シンボルを活用することについて述べてきました。これは伝えられたことを理解することができやすいように、その環境を作るためにシンボルを活用することです。つまり、受容性のコミュニケーションについて述べてきたということになります。しかし、コミュニケーションは双方向のものでなくてはなりません。受信だけでなく発信できるようにしていかなければならないということなのです。

知的障がいをもつ子どもたちの中には適切な発信行動を身につけていない子どもたちもいます。このような子どもたちは多くの場合一般的に受け入れられないような逸脱した行動で意思表示をしていることが多いようです。それは、適切に伝える方法について学ぶ機会が、これまで少なかったことに原因があるのではないのでしょうか。音声だけが主たる伝達方法のなかで、音声表出によるコミュニケーションを苦手としている子どもの場合は、適切な表現方法を身につけることができなかったのではないかと考えられるのです。また、うちの子は話ができないからという理由で、子どもに意志を確認することなく話を進めたりする事も多かったものと思われます。このような理由で、適切な発信の方法を身につけることができなかったということなのです。しかし、子どもの方にも意志はあります。伝えたいことがあるのです。「これが食べたい」、「これで遊びたい」というようなことです。しかし、今の自分の力で可能な範囲での、適切な意思表示の方法を身につけていなかったために、逸脱した方法で伝えることになってしまうのです。逸脱した方法を故意に選択しているわけではありません。そのような方法しか知らないために、そのようになっているのです。だれも、お母さんを困らせようと思ってしているのではないということなのです。ですから、このような場合、適切な表現方法を身につけることができれば、逸脱した行動は改善されることがあるということになります。今からでも遅くはないのです。子どもたちが発信できるように練習していけばよいということなのです。

子どもたちが表出する方法を練習するうえで、最も簡単な方法は、選択する場面を設けることです。生活の中で様々な場面で選択する場を設け選ぶ経験をするようにしていくのです。

(イ) 直接選択から間接的な選択へ

選択の場を設けるときの最初の段階では、直接そのものを選択する方法が考えられます。目の前に物を並べて「どちらにするの」と問い、いずれかを選択してもらうのです。直接手が伸びてきた方を選んだことにします。たとえばジュースならば、手が直接伸びてきた方をコップに入れるようにするのです。いろいろな場面でこのような選択をする練習をしていると、次第に直接手を伸ばして選択することができるようになってきます。おやつするときにも、必ず数種類のお菓子やジュースを用意しておき選んでもらうようにするのです。このようにして、選ぶという経験を繰り返すことで、自分の意思が反映された経験を数多くしてもらうようにします。

直接選択ができるようになってくると次は間接的な選択ができるように練習していくようにします。たとえば、おやつ場面であれば、大好きなお菓子を写真やシンボルにしておいて、それを選ぶように促すのです。選んだ写真やシンボルのカードを手渡してもらって、選んだお菓子をお皿に出すようにします。実物を選ぶわけではないけれど、間接的な写真やシンボルカードなどを選ぶことで実物が出てくるという経験を繰り返すわけです。最初は実物も見える場所に置いておき、シンボルカードを手渡し練習をし、次第に実物は見えなくしていき、実物がない場所でもシンボルカードで選ぶことができるようにしていきます。そして、実物が見える、見えないにかかわらず、写真カードやシンボルカードで要求することができるように練習していくということです。このような場面は、おやつだけではなく、好きなDVDを選ぶときにも使うことができるでしょう。いろいろな場面で、間接的に選ぶ経験もしていくのです。

このように繰り返していくと、写真カードやシンボルカードを小さなシステム手帳に入れて、それを使って発信することができるようになっていく場合もあります。コミュニケーションブックに発展させていくわけです。いろいろな手段で、相手にわかるように、自分の意思を伝えることができるというのはとても素晴らしいことです。

2. シンボルの種類

ところで、コミュニケーションするために使われているシンボルにはどのような種類があるのでしょうか。もちろん手書きで作られたものもあるのですが、ここでは日本語化されているコミュニケーションシンボルについて紹介しておきたいと思います。サウンズ・アンド・シンボルズ、PCS、PIC、PMLSといったものが日本語化されている代表的なシンボルになります。

サウンズ・アンド・シンボルズは主に脳性マヒのある方がコミュニケーションするために用いることが多いものです。文字盤と組み合わせるようになっていきます。

PCSは3000種類以上のオリジナルのシンボルが用意されているコミュニケーション用のシンボルです。ボードメーカーというソフトを使うと、シンボルを検索してコミュニケーション用のシートやコミュニケーションエイド用のシートを作ることができるようになっていきます。

PICは白黒のシンボルです。日本語版PIC絵単語電脳コミュニケーションプログラムというソフトを使用すると、1071個のシンボルの中から必要なシンボルを検索して印刷することができるようになっていきます。もうすぐPMLSというソフトも発売されます。これもなかなか優れたソフトです。もう一つ、4月27日に学研から「ちょこっとコミュニケーション」という本が出ます。私も著者の一人として関わっている本なのですが、その本の中にもプリントアウトすることができる300種類の画像を入れています。これもきっと使えると思います。お楽しみに。 さて、次回からは、VOCAについて触れていきたいと思います。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラスルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (エンパワメント研究所) など